公民館のこれまでとこれから
～参加と協働の多様性をめざして～

平成30年1月28日（日）、福生市公民館開館40周年記念事業を行いました。総合司会小澤はる奈氏（公民館運営審議会委員）の進行で祝賀演奏（福生吹奏楽団アンサンブル）、式典（川越教育長の主催者あいさつ、加藤市長・杉山市議会議長の祝辞）の後、5人の登壇者によるシンポジウムが行われ、公民館40年の歴史を振り返り、これからの公民館のめざすところが提起されました。

写真左から…コーディネーター伊東静一氏（東京学芸大学）、パネリスト　野澤久人氏（前福生市長）・加藤孝子氏（公民館利用者）・野村亮氏（NPO法人自然環境アカデミー事務局長）・山西年男氏（公民館利用者）

市民の手によりつくられた公民館

シンポジウムでは初めに野澤氏から公民館建設に至る経過を報告していただきました。

福生市青年団体連絡協議会を中心に「ふっさ『公民館』を創る会」が学習を積み重ね、文化連盟（現文化協会）、婦人団体など多くの市民を巻き込み、市議会への陳情・請願や市、教育委員会への働きかけにより開館につながったこと、そこには市民の情熱と学習活動があったこと、福生の公民館は市民の手で創られた、と言うことができます。

公民館、出会いと楽しさ、生きがい

その後、登壇者の皆さんから公民館活動との出会いや自身の活動の一端が紹介されました。

野村氏は、小学生時代に野鳥観察会とサークル活動に出会い、公民館での学びを継続。その力をNPO法人設立に。地域での学びの継続と子どもたちのために活動していきたいと語られました。

加藤氏は、子どもが1歳の時に公民館の保育付講座に参加。仲間や職員との出会いが自身の生き方に影響を与えたこと。その後、PTA活動や子どもの部活動の応援で公民館から離れたが、今、自分自身の人生を仲間との合唱活動等で豊かに過ごしていることが報告されました。

山西氏は、公民館の講座に参加した際に、主体的に学びを創造することに出会い、達成感を得たこと。その後、活動している男声合唱や利用者連絡会、公民館のつどいに関わる中で公民館への理解が深まり、利用者連絡会の推薦を受け、公民館運営審議会委員を引き受け活動していることが報告されました。

野澤氏からは、人は人とのつながりの中で様々な影響をしあい、成長していく。そのような関係を引き継いでいくことが大事。人生のある時期、公民館と離れることがあっても、戻ってこられる場所があることは重要。また、苦労はあるが、主体的に取り組むことにこそ面白味があり、自身の成長につながる、と語られました。

公民館は居場所、そしてハブに

その後、これからの公民館について野村氏は、公民館が果たしてきた役割や生み出してきたものの重要性をふまえ、限られた人材や財源の中で、学び合う、交流し合う、つながり合うという機能は、人を育てていくためにどうしても必要。学校と社会教育がもっとつながっていくことが必要では、との思いが話されました。

加藤氏は、今までもそうであったように「居場所」としての公民館が、今後、例えば、様々な要因で学校に行けなくなった子どもたちの拠り所になれるといいのではないか。また「市民の手で創りあげた公民館」ということを広く伝えていかなければならない、と語られました。

山西氏からは、地域との関わりをさらに広く、深くしていくこと。そして、地域の問題に関わっていく時に公民館がハブとして機能していく重要性をご指摘いただきました。

参加と協働の多様性で　地域の豊かな生活空間を

最後にコーディネーターの伊東氏からは、少子高齢、地域コミュニティの希薄化の中で、公民館は学ぶ、学び合う、交流し合う、つながり合うことで新たな文化を創造してきた。そして、学び合うことで個々人としての発達があった。

今後、地域の生活空間を考えていく学びが求められており、知恵を集め、地域とのつながりを深め、合意を積み重ね、行動につなげていくことが重要。その上で、一人ひとりの住民、利用者が公民館活動や地域の活動に参加し、協働の取り組みをしていく。そして、NPO、民間企業、研究機関や行政機関と協働し、対等な立場で話し合い、合意形成を積み重ねていく取り組みを、福生でしていきましょう、とまとめていただきました。

公民館開館40周年記念誌を発刊、シンポジウムの記録も所収しています。市内の公民館・図書館で閲覧できます。また、市のホームページに掲載しています。
福生市HPサイト内検索▽「公民館　40周年記念誌」